

新橋にての御立姿、今も眼につき申候、蔭ながらの御見送りと覺りて云ひ知らず悲しう、誰に御聞きなされ候ふにや、まこと相済み申さず、されど新橋いたすては叶はぬしきなりしに候、只一言の御断りも無う突然の歸國、まこと云ひ甲斐無き女と御腹も立ちて候べし、われこそ君様戀ひては親も小さく道も小さく、くだらなき愛世の義理にさかしらふらん心はさう御座なく候へ共、いろ／＼行末の事共思ひ廻らし候ふて、辛くとも此處暫し、君一人を都に置き、蔭ながら御成功相待ち候ふかたよしと氣付き申候今更記すも悲しう候へども、御身に數々の迫害、それは皆なわれとの關係相知候ふてよりのこと、御郷里より御上京の方様、何を御覽なされて何のお爲にか、關口邊りに所帯もち居候由、ありませぬことを専ら御ふれなされ候ふが、伯父上様御耳に入りて激しき御立腹、御勘當も御無理ならず。君おいとしようお、という候、われこそ學校は今一年にて候へども、君お一人御成功被下れ候は、高が女性のわれなど何うなりてもよろしく、此度早稲田にうつり度くと仰せられ候を、相手の女の文學好きなればの故と一途に思召し候ふは、恐れながら伯父上様御かんちがひ、されど御傍に居候へば何彼と誤解も候ふ可く、假令田舎に引こもり候へばとて、常々讀書に心掛け候はんには、さしての相違も候ふ同敷く、彼の日御下宿を御たづね申上げ候ふも、まこと御いとま申上度くことに候、虫が知らずか、しきりと御心細げにのみ泣き沈み、故郷へ歸つちや嫌ですと、一度ならず二度ならず、浸々繰り返へしての御仰せ、只うつむきてしとの涙に、君驚かせ奉りしか、御膝によりて泣き沈み泣き沈み、御手をとつて思はずもそとに接吻致し候へば、美代さんと悲しきおこゑに御呼び掛けなされて、如何かしたの、すつかりお話しなさい、いつそ打ち明けてとも思ひ候へども、若しものこと有之候ふては取り返へし付き申さず、いゝえとのみにまがらして、勿體なれど其後ばあやふやに云ひ抜けてばかり、得堪へぬやみを胸にかくして、今山住みのわが心細くみ被下れ候は、素より御惻怍の君様ゆゑ其のことは萬々候ふまじけれど、か

けても自棄なと御出し遊ばさぬやう、われこそ此後ばたやうぞ忍びしと御迎へ被下候日ののみ、其日ののみ力に待ち暮らすべく候、嫌れて御預り申置候つゝら一つ、御部屋に押入れせまければ、御困りなさるべくとは存候らひしも、われこそ出立の後には是非御手許にとつけ呉れ候やう、松やに頼み置き候が御受取り被下され候ふや、幼かりし日の御すさびなりとて、いつぞや御示しの作文帳と、なき御親様まだ御遺者にて、君漸くお八つ頃とか、金ばたん制服仕立ての洋服に四角な帽子お冠りなされて、愛くるしきうちに何處か誇かましとてわれこそ笑ひ候御うつし、御かたみに頂き候まゝ御探し遊ばさぬやう、此頃ふと氣付き候へば上の襟章さへ付きて候、ふもや幼き君様のみの御希望にては候まじく、今頃はお好きな／＼文學を何不自由なく御研究相叶ひ候へきを、幼うて父君失ひ給ひし御不運、かへす／＼悲しう候、學資はななくとも御志だに候は、一時は思ふにまかせず、人に後れて口惜しと思し給ふべけれど、盤龍の更に雲を得て天上にかけ上る時候ふ如く、やかては嬉れしき得意の日も候べく、必ず／＼お氣を落しては被下れ間敷く、われこそ此の歸國は、普通かゝる少女のそれとは違ひ、今われらの迎へべき正しき道にて候まゝ、淋しくとも辛くとも堪へればなり申さず、餘り御壯健もなき御體、御大事に／＼お風召さぬやう、それのみ念じ入り逢らせ候。

梅雨は降るものとて今更致方も候はれど、丁度入梅の其日より引續いて十幾日、一寸の時間もなければ、うそにもお日様の御顔拜むこともなく、夜晝露雨しき軒滴の音のみ聞き候て、戀しき都の空眺めてはたゞ君の御上を偲び泣くにて候、今朝三郎様御文にて承り候へば、先とや學資の都合相つき候て、御希望通り早稲田に御入學の由、伯父上様御心今向とけやらず、三郎様中村様の御骨折りにもや、君お幸あだには御思ひなされ間敷く、よき友御持ちなされればこそにて候。兵役も御免なされしとの御事、高い聲にては申されず候へ共、之もお嬉しう存候、されど兩種にてと申すが如何にしても氣掛りに候、別家の從兄にそれとなく尋ね候處、その様に案じる程のこともないが變な質問じやないかと、ひとの胸を讀むやうの眼付き致し候に、云ひ知らずきまり惡しく其上は得聞き申さず、何處かお悪いのにては候はずやと一人胸痛め居候、折柄、午後新聲到着、君様大會へ御出席の由なれば、花見寺の寫眞、あれこれと探し申候、片時相忘れ候はれば一

目にそれと知れ申すべきを、さりとは淺間しきまでの御やつれ、御別れ申せしは二月の初旬、瘦形のすらりとした御體格にては候らひしが、僅か三月たらずをかばかりのと思へばわれは涙に候、君様去年の此頃は脚氣を御病ひなされしが、如何やと御案じ申候、若し少しにても其氣味候は是非／＼御手當なさるべく、かろければとお風と此病氣ばかりは投げやりになり申さず、近くは松下様の例も候、鶴龜々々、ふんぎてもなき事記して御免被下され度、故郷の庭の小石一つ、現在の住居の井戸に投じて、其ればかり飲み候へば自然脚氣の起らぬ由さる人申候、おまじない等勿論あてにはならず候へ共、又むけに退け候にも及ぶまじく、お藥嫌ひの君、たにしの黒焼には御閉口なされ候とも、これは譯もなきこと、伯父上様召使のうちに君びいゝの誰ぞに御頼みなされ、至急庭の石一つとりよせて御試み遊ばすやう、かつがれたと思さばお腹も立つまじく、さらばわれこそいささかの安心致し候。夜別家の從兄遊びに参り候て種々皮肉申候、從兄は他人の初まりとか、昔よりの諺にて候か、餘りとと思ひやりなき仕打ちいつも情け無う、君様なられど、世の中の誰も誰もいや、頼りにはならぬとついちれたくも成り申候、されど三郎様の御深切な思ひ候へば身に染みて嬉れしう、よろしく御傳上被下れ度、新橋申ては御怒りなさるべけれど、君は随分と激しき御痛癢、例の無理云ひて御困らせなされしやと氣に掛り候、餘り過ぎては終に惡しく、思すことも候べく、美代が詞はまことに候へばよく御思ひなされ人惡まれせぬやう父君とも母様とも、其君を力にわれこそ涙の中の山住み致すにて候、早や夜も更候て、母家よりしきりと呼び立て候まゝ筆とめ申候、氣候不順なれば折角御厭ひなされ度、三郎様中村様への御禮狀同封致し候。

悲しき御文にて候かな、三年五年とそんな香氣なことを云つては居られず、途中で僕は驚れるかも知れぬと、苦しき／＼心われも同じと御知りなさるべく、然れど堪へればなり申さず、島崎先生の二年間、破戒を御讀みなされての御感仰せ越しなされし、其御元氣に御復りなさる事は叶はぬのにや、彼の君のお心にさへおはさば、若痛の三年五年は束の間に、嬉しき其日來るべく、われこそ朝目覚め候て云ひ知らぬ悶えに大聲あげて泣き出し度く、何は／＼かりなき三歳の妹羨み候ても見候が、戀し君おはせばこそ、仰られ候如く一人死ぬ時は二人が死ぬと同じ時、二人が死ぬ時は世界に眞の嘆きの候ものを、神はわれらの一人をだも

見殺など、其様の無慈悲は遊ばすまじく、表面にはかく申候とも弱きは女心のもう／＼悲しきこと云ひて泣かせては被下るな。あゝ美代さんが戀しいと、われこそ此處にて君様戀しな様り返し候、申上度きはまだ／＼有之候へ共、折師米子の伯母様お泊りとてあれこれ暇なく候、君くれ／＼も努めて強く御なり被下度く、さらば。